様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

平成 ２６ 年　 ５ 月 ２２ 日現在

機関番号：３２６８９
研究種目：基盤研究(C)
研究期間：2011～2013
課題番号：２３５３０１７０

研究課題名（和文）戦時在独日本大使館員の亡命をめぐる情報戦ーー崎村茂樹の軌跡と周辺

研究課題名（英文）The War of Information about a member of the wartime Japanese Embassy in Germany: Shigeki Sakimura and his Desertion

研究代表者
加藤　哲郎（Kato, Tetsuro）

早稲田大学・政治経済学術院・教授

研究者番号：３０１１５５４７

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　3,900,000円、（間接経費）　　1,170,000円

研究成果の概要（和文）：　崎村茂樹のご遺族の協力も得て、ドイツ、スウェーデン、イギリス、アメリカで収集した第一次史料をもとに、崎村茂樹の履歴を明らかにし、経済学者としての崎村の著作・論文のほとんどを収集できた。
　在独日本大使館員崎村の第二次世界大戦中スウェーデン亡命期における、ヴィリ・ブラント、ミュルダール夫妻ら後のノーベル賞受賞者たちとの接触、「ストックホルム民主主義的社会主義者のインターナショナル・グループ」への参加を確認し、「社会民主主義の国際連帯と生命力ーー1944年ストックホルムの記録から」という論文に仕上げた（田中浩編『リベラル・デモクラシーとソーシャル・デモクラシー』未来社、2013年に収録）。

研究成果の概要（英文）：This study focused on Dr. Shigeki SAKIMURA, former lecturer of economics of the University of Tokyo and a staff of the Japanese Embassy in wartime Germany. He defected to Stockholm from Berlin in 1943-44. He was reported by "New York Times"(May 1, 1944) and "The Time" (June 5, 1944) as the Japanese political refugee who first spoke out the defeat of Nazi-Germany and Imperial Japan. I researched his defection and activities in the wartime at the National Archives in Germany, Sweden, Britain and the USA, and found his life history, his works as economist, and the fact that he touched the social democratic "Little International" in Stockholm which was organized by Willy Brandt (postwar Prime Minister of West Germany and the Nobel Prize wiinner), Gunner & Alva Myrdal (Nobel Prize winners) , Bruno Kreisky (postwar Prime Minister of Austria) etc. I wrote these history in the article "International Solidarity of Social Democracy in Stockholm 1944."

研究分野：社会科学

科研費の分科・細目：政治学・政治史

キーワード：情報戦　亡命　崎村茂樹　荒木光太郎　日独関係　在独日本大使館　インターナショナル　社会民主主義

１．研究開始当初の背景

本研究は、崎村茂樹という無名の一知識人の戦時亡命の問題を、申請者が歴史的に研究してきた「亡命の政治学」と、理論的に探究している「情報政治学」の交点で追及するものである。先行研究は、申請者自身の発表した「情報戦のなかの『亡命』知識人―国崎定洞から崎村茂樹まで」（『インテリジェンス』第９号、2007.11）以外に全くなく、その関連地域が日本、ドイツ、スウェーデン、中国、アメリカ合衆国と多岐に渡るため、インターネットを通じた世界からの情報収集と共に、各国外交軍事資料・インテリジェンス資料の探索が必要とされた。

２．研究の目的

本研究は、第二次世界大戦中の 1943–44 年に駐独日本大使館嘱託でありながら中立国スウェーデンに亡命し、当時の『ニューヨーク・タイムズ』『タイム』等連合国側メディアで「初めて連合軍に加わろうとした日本人」「枢軸国の敗北を初めて公言した日本人」と報道された、元東京大学講師崎村茂樹の軌跡と周辺の解明を通じて、亡命という行為の持つ政治的意味と効果を、情報政治・情報戦の観点から解明する。1945 年の日本敗戦後、崎村茂樹は米国情報機関の機密記録にのみ残され忘れ去られた。その周辺での戦時欧州の諜報戦、ドイツ敗戦時の在欧日本人、1950 年中国毛沢東暗殺未遂事件など、20 世紀政治史の隠された史実の発掘としての意味を持つ。

３．研究の方法

本研究は、戦時在独日本大使館員でありながら、戦争末期に中立国スウェーデンに亡命し、連合国側の戦時宣伝に組み込まれた崎村茂樹という知識人の生涯を、①ドイツ留学以前（1909-41）、②ドイツ滞在中のスウェーデン亡命(1943-44)、③ スウェーデンからドイツへの強制送還と、ドイツ敗北による満州国への移送（1944-45）、④中国にとどまっての活動と「米国のスパイ」罪による新中国での禁固拘束（1945-55）、⑤帰国後の沈黙（1955-82）に分けて、それぞれの時期の歴史的資料を収集し、史実を確定する。同時に崎村の「亡命」という行為を促し、また、その後の沈黙を強いた日独同盟史、外務省史、戦時欧州情報戦・宣伝戦、戦後中国内戦、新中国の外国人統制などについて解明する。これまでの探求から、以下が「崎村茂樹の６つの謎」として浮上してきたので、それを中心的論点とする。

① 若き崎村茂樹は、リベラル左派だったのか、親ナチ右派だったのか？

② 崎村茂樹は、なぜスウェーデンに「亡命」したのか？

③ 崎村茂樹の 1943-44 年「亡命」は、連合軍との「和平工作」を意味するか？

④ いったん「亡命」した崎村茂樹は、なぜベルリンに戻り、ドイツ敗戦をいかに迎えたか？

⑤ 1945 年５月ドイツ敗戦で、崎村茂樹は、なぜ日本に戻らず、中国に向かったのか？

⑥ 1945 年９月以降、崎村茂樹は、なぜ内戦さなかの中国に入り、何をしていたのか？

４．研究成果

（１）上記「６つの謎」のうち、①の渡独前の時期については、東大経済学部教授荒木光太郎（金融論）・光子夫妻との関係が、崎村の経歴を左右していた。荒木光太郎教授の日独学術交流、荒木光子の在日ドイツ大使館との交流（オット大使及び政治顧問のリヒアルト・ゾルゲら）に、「語学の天才」崎村が同行し、介在していた。

②③④のスウェーデン亡命については、米国国立公文書館所蔵の戦時在独日本大使館押収記録から、当時の内務省ベルリン事務所佐藤彰三作成の報告記録（Records of Former German and Japanese Embasies and Consulates, 1890-1945 国会図書館議会官庁資料室所蔵　YD-176　T179、Reel No.70）が入手できた。ドイツ外務省記録、英米軍・情報機関記録、スウェーデン警察記録等の探索で。詳細な事実が明らかになった。とりわけ『ニューヨーク・タイムズ』『タイム』のほかに、当時の連合国側ラジオ放送で大きく取り上げられた記録があり、戦時情報戦を、新聞・雑誌のみならず、ラジオを含めて検討することができた。

全く証言のなかった戦時在独日本大使館関係者のなかからも、公開講演会で一緒に報告した評論家佐藤優氏が、申請者の論文を当時ベルリン日本大使館勤務で元外務省アメリカ局長吉野文六氏に示して確認を求め、亡命の事実が認められた。

（２）さらに、戦後西独首相・ノーベル平和賞受賞者ヴィリ・ブラントの自伝中に、亡命中のブラントが率いたストックホルムでの反ナチ社会民主主義者の地下組織 International Group of Democratic Socialists in Stockholm（通称 Little International）の参加メンバーとして、戦後オーストリア首相クライスキー、スウェーデン人経済学者グンナー＆アルヴァ・ミュルダール夫妻（戦後それぞれノーベル経済学賞・平和賞受賞）らに加え、1944 年頃に「ベルリン日本大使館から逃げてきた一人の若い日本人」を挙げていたが（Willy Brandt,"Links und frei: Mein Weg 1930-1950", Hoffmann und Campe,

1982,S.341)、それが崎村茂樹に間違いないことを、スウェーデン国立公文書館及びドイツ・ボンのドイツ社会民主党ブラント・アーカイヴの資料から確定することができた。

（3）「6つの謎」の⑤⑥については、崎村の師である荒木光太郎が、戦後東大をパージされて後、GHQ戦史課勤務時に中国の崎村と連絡していた可能性があり、GHQ/G2のウィロビーと親しかった荒木光子夫人との関係を含め、崎村の中国滞在・米国領事館勤務がGHQ/G2及びOSS/CIA（米国諜報機関）と関わった可能性が大きいが、この点は、中国公安資料へのアクセスが困難で、本研究期間中は、英米資料からの間接的証明に留まった。米国国立公文書館の1945-50年在中国米国領事館記録から、崎村が書いたと思われる中国農業・農村事情についての報告書などを発見した。

（4）　最終的に研究期間内に単行本の書物にするには至らなかったが、本研究の中間報告として、ドイツ、スウェーデン、イギリス、アメリカでの収集第一次史料をもとに、スウェーデン亡命時代の崎村茂樹とヴィリ・ブラントら亡命社会民主主義グループとの関わりを中心に、「社会民主主義の国際連帯と生命力ーー1944年ストックホルムの記録から」という『未来』541号掲載論文に仕上げ、田中浩編『リベラル・デモクラシーとソーシャル・デモクラシー』という論集（未来社、2013年）に収録できた。

（5）崎村茂樹の生涯の全体像については、ご遺族崎村家のご協力も得て、おおむね、以下の年譜にまとめることができた。

＜崎村茂樹・年譜＞

1909年、東京に生まれる、高知高等学校理科乙類から東京帝大農学部農業経済学科卒業。
1932年、東京帝大経済学部荒木光太郎教授の助手、のち上智大学講師、東大農学部助手・講師。
1941年、外務省嘱託として渡独、独ソ戦開始により帰国予定を変更して残留、日本鉄鋼統制会ベルリン事務所の嘱託となる。
1943年、在独日本大使館嘱託時にスウェーデンに渡航して「亡命」、ストックホルムで連合国軍にも接触。
1944年5月、「ニューヨーク・タイムズ」で「枢軸国の敗北を初めて公言した日本人」と報道され、ナチス・ゲシュタポと日本大使館の捜索・拘束によりベルリンに強制送還、大使館監視下で軟禁される。
1945年、ナチス・ドイツ敗戦で在欧日本人一行と共にシベリア経由満州国へ、しかし日本には帰国せず長春（当時の新京）滞在。
1946年、在中国・長春米国領事館に通訳・経済分析担当で勤務。
1948年、在北京米国総領事館勤務員、北京陥落・米国大使館台湾移転後も北京に残留。
1950年、建国直後の中華人民共和国で「米国経済間諜」として逮捕され禁固刑、日本では「毛沢東暗殺未遂事件」に連座と報道される（「毎日新聞」1951年8月21日）。日本の留守家族は、この報道で初めて、崎村茂樹が戦後も生きていた消息を知る。
1955年、拘束を解かれ中国から帰国、矢部貞治学長に請われて、拓殖大学経済学部教授。
1961年、日本鉄鋼統制会ベルリン事務所時代の上司八幡製鉄島村哲夫常務に請われ、八幡製鉄嘱託、東京理科大学教授（工業特許担当）。ただし、ドイツ・スウェーデン・中国での15年間の体験については、帰国後家族にもほとんど語らなかった。
1982年、食道ガンで死去。

（6）　経済学研究者としての崎村茂樹の仕事は、以下の著作・論文一覧に仕上げることができた。

＜崎村茂樹著作・論文一覧＞

1933年　「満州農作物の銀資金　日満経済発展の視点に立ちて」（「農業經濟研究」第9巻4号）
1935年　「農家負債問題の検討」（「財政経済時報」第22巻8号）
1936年「アメリカ銀政策の発展」（「財政経済時報」第23巻2号）
「アメリカ銀政策の本質と意義」（「東亜」8巻7号）
1937年　「オープン・マーケット・オペレーションの矛盾」（「外交時報」第777号）
「一般信用理論に於ける組合信用の地位」（「農業經濟研究」第13巻2号）
「ハイエークの景気理論と利子説――最近の新学説（1）―（3）」（「ダイヤモンド」第25巻11-13号）
ヨハネス・ラウレス著『スコラ学派の貨幣論』（翻訳、有斐閣）
「農村人口移動の階級性とその社會經濟的諸要因福井縣下農村調査中間報告」（京野正樹・神谷慶治と共著、「農業經濟研究」第13巻4号）
1938年　「紹介　フリッツ・ノイマルク『經濟政策の新しきイデオロギー』」（「経済学論集」8巻4号）
「インフレーションと農業信用――ドイツ・インフレーション下に於ける経験」（「農業經濟研究」第14巻2号）
「北支農村経済の諸問題」（『北支経済開発の根本問題』刀江書院）
「北支の幣制と農民経済」（「帝国農会報」第28巻9号）
1939年　報告「事変下の農業問題を主題として」（「日本諸学研究報告」第5編・経済学）
「農業政策の社会哲学的基礎付けへの試み（其の

１・２)」(「食糧経済」第 5 巻 314 号)
「民族主義と農民」(「エコノミスト」第 17 巻 16 号)
「北支の食糧問題」(北京にて、「食糧経済」第 5 巻 11 号)
「労働政策としての農業政策」(「農業と経済」第 6 巻 12 号)
1940 年 「日本農業技術の発展に関する覚書」(「農政」第 2 巻 8 号)
「朝鮮農民の内地農村定着」(「大陸」第 3 巻 8 号)
「稲作に於ける中耕=除草技術の発展過程」(「農業經濟研究」第 16 巻 3 号)
「北支の食糧問題」(東畑精一著『米』中央公論社、付録)
「北満における小作形態の考察」(近藤康男他編『佐藤寛治博士還暦記念農業経済学論集』日本評論社)
1941 年 「蘭印に於けるプランテイシヨンと苦力政策の問題」(「新亜細亜」第 3 巻 1 号)
「国策会社と産業組合」(講演記録、「産業組合」第 426 号)
報告「満州国建設と五族共和」(第 3 回日独学徒会議、チロル)
1956 年 「通貨交換性と貿易自由化」(「拓殖大学論集」第 12 号)
1957 年 「EPU と通貨交換性」(「上智経済論集」第 3 巻 2 号)
「経営パートナーシャフトについて」(「拓殖大学論集」第 15 号)
フリードリッヒス・ゴーセンス著『アメリカにおける利潤分配の実際、西ドイツの訪米視察団報告書』(翻訳、日本生産性本部)
「公正賃金とパートナーシャフト――西独の労使協調はいかに行われているか」(「経済往来」1957 年 10 月号)
1960 年 「特許ライセンス研究序説、アメリカの反トラスト法との関連において」(「拓殖大学論集」第 25 号)

ドイツ語著作

Neuordnung der japanischen Wirtschaft, Bremen: NS.-Gauverl. Weser-Ems, 1942(『日本経済の新編成』、ヴァイマール大学図書館ほか所蔵)
Die Berufsausbildung der Jugend im nazistischen Deutschland, in, Briefwechsel aus dem schwedischen Exil(「ナチス時代のドイツの青少年の職業教育」、ボン大学フランツ・モクラウアー文庫所蔵)

（7）崎村茂樹に関係する日本語・外国語文献

阿羅健一『秘録・日本国防軍クーデター計画』(講談社、2013)
荒木光太郎編『日独文化の交流』(明善社、1941)
荒木光太郎教授追悼論文集刊行会『荒木光太郎教授追悼論文集』(1981.4)
火曜会編『おもいで 故荒木光太郎先生三十年忌の思い出集』(東京火曜会、1981)
伊藤隆・劉傑編『石射猪太郎日記』中央公論社、1993 年[昭和 19 年 5 月 6 日項]
嬉野満洲雄『勝利を惧れる』(共立書房、1946)
嬉野満洲雄「私のみたナチス・ドイツ」(日本共産党『反共主義 歴史の教訓』1975)
江尻進『ベルリン特電』(共同通信社、1995)
大堀聡「ベルリン日本人会と欧州戦争」
http://www.saturn.dti.ne.jp/~ohori/sub24.htm
小野寺百合子『バルト海のほとりにて』(共同通信社、1985)
加藤哲郎「情報戦のなかの『亡命』知識人――国崎定洞から崎村茂樹まで」(20 世紀メディア研究所『インテリジェンス 』誌第 9 号、2007 年)
加藤哲郎「政治の境界と亡命の政治」(加藤哲郎・今井晋哉・神山伸弘編『差異のデモクラシー』日本経済評論社、2010 年 6 月、序章)
川口忠篤『日僑秘録』(太陽少年社、1953)
邦正美『ベルリン戦争』(朝日新聞社、1993)
国松文雄『わが満支二十五年の回顧』(「毛沢東暗殺の首謀にされ銃殺された山口隆一君」新紀元社、1961)
桑木努『大戦下の欧州留学生活』(中公新書、1981)
黒井文太郎『謀略の昭和裏面史』(宝島社文庫、2007)
小松ふみ子『伯林最後の日』(太平洋出版社、1947)
斎藤正躬『北欧通信』(月曜書房、1947)
崎村茂久『ドイツと日本』(三修社、1978)
崎村茂久「ヨーロッパ/鍵のシンボリズム」『鍵のかたち、錠のふしぎ』(INAX、1990)
佐藤優「国家の嘘、第 11 回 ソ連参戦前夜」『現代』2008 年 8 月号
草野文男編『拓殖大学創立 80 年史』(1980)
佐藤彰三『時局と情熱』(新光閣、1939)
佐貫亦男『追憶のドイツ：ナチス・空襲・日本人技師』(酣燈社、1991 年)
篠原正瑛『ドイツにヒトラーがいたとき』(誠文堂新光社、1984)
島村哲夫『鉄鋼経済論』(東洋経済新報社、1958)
島村哲夫随想集『徹平随想』(非売品、1962)
追悼集『島村哲夫君を偲んで』(非売品、1978)
千足高保『ドイツに学ぶ』(美和書林、1949)
新関欽哉『第二次大戦下ベルリン最後の日』(NHK ブックス、1988)
樽井近義『ヒトラー最後の十日間』(美知書林、1948)
中島辰次郎『馬賊一代 下 謀略流転記』(番町書房、1976)
鍋山貞親『私は共産党をすてた』(大東出版社、1950)
芳賀檀『ドイツの戦時生活』(朝日新聞社、1943)

秦郁彦『昭和史の秘話を追う』（ＰＨＰ研究所、2012）
畠山清行『キャノン機関』（徳間書店、1971）
長谷川春雄「毛沢東暗殺事件<天安門事件>の真相」（『中央公論』1962.6）
藤山楢一『一青年外交官の太平洋戦争』（新潮社、1989）
古島敏雄『社会を見る眼、歴史を見る眼』（農文協、2000）
ミナーエフ『あばかれた秘密　国際帝国主義の陰謀』（新日本出版社、1961）
三山喬「夢路の果てーー<毛沢東暗殺犯>にされた日本人」上中下（『望星』2009,5-7）
三山喬「まぼろしの<毛沢東暗殺計画>の全貌」（『諸君』2009.4）
『守山義雄文集』（非売品、1965）
笠信太郎『知識と知恵　その他』（文藝春秋、1968）
『矢部貞治日記』（読売新聞社、1975）
山本武利編『第２次世界大戦期日本の諜報機関分析欧米編１』（柏書房、2000）
養道希彦『薔薇色のイストワール　ナチ占領下、パリを震撼させた舞踊家・原田弘夫の 92 年』（講談社,2004）
四本忠俊「マールスドルフ篭城記-序-ヒトラー・ナチの独裁時代」（『明治大学教養論集』29号,1965）
和田博文ほか『言語都市ベルリン　1861-1945』（藤原書店、2006）
『朝日新聞』1951 年 8 月 19 日,「日伊人を死刑、毛沢東暗殺計画」
『毎日新聞』1951 年８月 21 日,草野文男談話「毛沢東案暗殺陰謀の真相」
「山口芙美子夫人の手記」（朝日新聞 1951 年 8 月 25 日,齋藤しょう『悪の研究』東京元々社、1959、『サンデー毎日』1953.1.11）
渡辺竜策「謎に殺された日本人―山口氏処刑の真相」（『週刊読売』1951.10.15）
「日本とドイツの雑学交換」
http://history.log.thebbs.jp/1083643857.html
「加藤哲郎のネチズン・カレッジ」
http://www.ff.iij4u.or.jp/~katote/Home.shtml

[外国語文献・資料]
朱振才『建国初期北京反間諜大案紀実[建国初期の北京におけるスパイ事件ドキュメンタリー]』(1950 年 8 月 8 日発覚「崎村茂樹経済間諜事件」、中国社会科学出版社、2006)
Records of Former German and Japanese Embassies and Consulates, 1890-1945 国会図書館議会官庁資料室所蔵 YD-176, NARA Microcopy T179、Reel No. 72.[連合軍押収文書・在独日本大使館内部記録中「崎村茂樹問題文書（伯林内務事務所佐藤彰三作成）」]
Japanese deserts Embassy in Berlin『ニューヨーク・タイムズ』1944 年 5 月 1 日
Way of a Rebel,英文『タイム』誌 1944 年 6 月 5 日
Old Hands, Beware! 英文『タイム』誌 1951 年５月 27 日
Die Tagebuecher von Joseph Geoebbels, Teil 2, Band 12 April-Juni 1944, K.G.Saur , 1995[独文『ゲッペルス日記』1944 年 5 月初め]
Karena Niehoff. Feuilletgonistin und Kritikerin. Mit Aufsaetzen und Kritikenm von Karena Niehoff und einem Essay von Joerg Becker. FILM & SCHRIFT, Band 4. Muenchen ,Verlag edition text + kritik, 2007.1
Willy Brandt, Links und frei: Mein Weg 1930-1950, Hoffman und Campe, 1982
Klaus Misgeld, Die "Internationale Gruppe demokratischer Sozialisten" in Stockholm 1942-1945: zur sozialistischen Friedensdiskussion während des Zweiten Weltkrieges, Bonn-Bad Godesberg : Verlag Neue Gesellschaft, 1976

５．主な発表論文等（研究代表者には下線）

〔雑誌論文〕（計 11 件）

①加藤哲郎、国崎定洞――亡命知識人の悲劇、安田常雄編『講座　東アジアの知識人』有志舎、査読無、第 4 巻、2014, 380-396
②加藤哲郎、『ゾルゲ事件とは何か』「解説」、C・ジョンソン著『ゾルゲ事件』岩波現代文庫、全１巻、査読無、2013, 445-458
③加藤哲郎、2013 年度歴史学研究会特設部会「大会報告批判」、歴史学研究、査読有、第 913 号、2013, 65-69
④加藤哲郎、国際情報戦としてのゾルゲ事件、日露歴史研究センター『ゾルゲ事件関係外国語文献翻訳集』、査読無、第 38 号、2013,17-33
⑤加藤哲郎、社会民主主義の国際連帯と生命力―1944 年ストックホルムの記録から、田中浩編『リベラル・デモクラシーとソーシャル・デモクラシー』未来社、査読無、全１巻、2013,101-121
⑥加藤哲郎、占領下日本の「原子力」イメージ、歴史学研究会編『震災・核災害の時代と歴史学』、査読無、全１巻、2012,131-146
⑦加藤哲郎、占領下日本の情報宇宙と「原爆」「原子力」―プランゲ文庫のもう一つの読み方、20 世紀メディア研究所『Intelligence』、査読有、第 12 号、2012, 85-94
⑧加藤哲郎、原爆と原発から見直す現代史、『エコノミスト』毎日新聞社、査読無、第 90 巻 42 号、2012, 62-65
⑨加藤哲郎、社会民主主義の国際連帯と生命力、未来社『未来』、査読無、第 541 号、2011,30-38
⑩加藤哲郎、亡命者佐野碩―震災後の東京からベルリン・モスクワへ、『The Art Times』、査読無、第８

号、2011，8-13
⑪加藤哲郎、宮城與徳訪日の周辺―米国共産党日本人部の二つの顔、日露歴史研究センター『第６回ゾルゲ事件国際シンポジウム報告集』、査読無、全１巻、2011,19-31

〔学会発表〕（計５件）
①加藤哲郎、国際情報戦としてのゾルゲ事件、上海師範大学国際シンポジウム「ゾルゲと上海情報戦」2013.9.15-16, 中国・上海師範大学
②KATO,Tetsuro, Why Japanese People could not avoid the Nuclear Plant Disaster, The XII International Congress of Latin American Association for Asian and African Studies (ALADAA, 招待講演)、2012.6.13-15, Puebla, Mexico
③加藤哲郎、宮城與徳訪日の周辺、第６回ゾルゲ事件国際シンポジウム（招待講演）、2011.10.22、沖縄大学
④加藤哲郎、日本マルクス主義はなぜ「原子力」にあこがれたのか、同時代史学会 2011 年度年次大会、2011.12.10、専修大学
⑤KATO, Tetsuro, Images of “Atomic Energy” in the Occupation Period in Japan, New York University Workshop on “Atomic Ordering on the Borders of Japan”, 2012.3.19-20, New York University, USA

〔図書〕（計４件）
①加藤哲郎、平凡社新書、ゾルゲ事件――覆された神話、2014, 1-256
②加藤哲郎、岩波現代全書、日本の社会主義――原爆反対・原発推進の論理、2013, 1-280
③加藤哲郎・井川充雄編著、花伝社、原子力と冷戦――日本とアジアの原発導入、2013, 1-270
④矢吹晋・加藤哲郎・及川淳子共著、花伝社、劉暁波と中国民主化の行方、2011,1-356

〔産業財産権〕
○出願状況（計０件）
○取得状況（計０件）

〔その他〕ホームページ等
「加藤哲郎のネチズン・カレッジ」Database
http://www.ff.iij4u.or.jp/~katote/Home.shtml

６．研究組織　（個人研究）

(1)研究代表者
加藤　哲郎（KATO, Tetsuro）
早稲田大学・政治経済学術院・教授
研究者番号：30115547